

令和5年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月11日実施)	総合評価(3月25日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①特色ある国際理解教育と「総合的な探究の時間」に係る研究と実践をとおして、探究的でグローバルな視野を持つ人材を育成する。</p> <p>②「育てたい生徒像」を見据え、共通性と多様性のバランスに配慮した教育課程の策定と実施を図るとともに、特別活動の充実をめざす。</p> <p>③「主体的・対話的で深い学び」をめざし、授業改善を実施する。</p> <p>④基礎的な基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視し、主体的に学習に取り組む態度を養う。</p>	<p>①特色ある国際理解教育を発展させ、積極的な教育活動を行う。また、姉妹校との交流を実施する。</p> <p>・総合的な探究の時間において、SDGsに係わる探究活動の継続を図る。探究活動により広い視野を持った人材を育成する。</p> <p>③④「主体的・対話的で深い学び」をめざした授業改善を行い、生徒の思考力・判断力・表現力を育成するとともに、学習意欲と自主性を伸長する。</p>	<p>①ユネスコスクールのネットワークを用いて様々な活動に積極的に参加する。また、6月のアサトン高校来校、3月のドンウオン高校訪問に向けて準備を行い有意義な交流を行う。</p> <p>・総合的な探究の時間において各学年担当者が中心となり、全教員が探究の授業を実践できる計画を立て、SDGsに係る探究活動を展開する。</p> <p>③④学校全体で「主体的・対話的で深い学び」型の授業実践を目指した授業見学や研究授業を計画をすることで、授業改善への意識改革を図るとともに参加者の研修成果に繋げ、生徒の思考力・判断力・表現力を育成する。</p>	<p>①ユネスコスクールのネットワークを用いた活動に年5回以上参加することができたか。</p> <p>また、姉妹校交流について事前・事後指導から成果物の作成をすることができたか。</p> <p>・総合的な探究の時間について、各学年の担当者が計画を立て、全教員が授業を実践できる計画を立案できたか。</p> <p>③④授業評価の結果、「思考力、判断力、表現力が高められたか」の値が7割を超えているか。</p> <p>・テーマを設定した研究授業を行い、意見交換ができたか。また、研修成果を共有できたか。</p>	<p>①フリー・ザ・チルドレンジャパンによる講演会、ユネスコスクール関東ブロック大会等5回の活動に参加した。</p> <p>・アサトン高校来校時の活動がTVKで放送され、ホストファミリー生徒の受入れの様子をまとめ掲示した。韓国姉妹校訪問に向けた相手校とオンラインミーティングを実施した。</p> <p>・総合的な探究の時間では、各学年の担当者が創意工夫を凝らした内容を提示し全職員で授業を実践することができた。</p> <p>③④授業評価結果からは、意欲的に授業に取り組む様子が読み取れるが、考えをまとめたり課題解決の方法を考える力が身につけていない。</p> <p>・1月に全職員で授業改善に向け「主体的、対話的で深い学び」をテーマに、研究授業と振り返り等の研修を行った。</p>	<p>①ユネスコスクールのネットワークを用いた活動に参加することができたが、生徒主体の活動にすることが今後の課題である。ユネスコ委員会の活動を活性化させていく必要がある。</p> <p>・姉妹校受入のホストファミリーの負担を減らすため、受入れた家庭の意見を参考にしながら次年度以降展開する。</p> <p>・総合的な探究の時間では、まだ、担当者の負担が大きい。本校の探究プログラム策定に向けて進めていきたい。</p> <p>③④生徒ひとりひとりの学習状況を把握し、他者との対話で得た知識を活用できるように授業改善を図っていきたい。</p> <p>・この形での研究授業は初めての実施であり、多くの課題が残った。次年度は実施時期を早めることで研修成果につなげるようにしたい。</p>	<p>①アメリカ、韓国との姉妹校交流ができたことは大変有意義である。交流訪問も目的を明確にして実施を前向きに考えたい。今後も国際理解教育の継続に期待する。</p> <p>・姉妹校交流のTV媒体での放映は広報活動に有益である。</p> <p>・SDGsをテーマにした探究活動は、生徒一人ひとりの個性が大いに発揮される授業づくりが展開できると思われる。次年度の授業研究が楽しみである。</p> <p>③④「主体的、対話的で深い学び」の研究授業を実践され、生徒がどの場面で学びが深まったかを見とることができ、職員全体の授業改善につながったと思われる。授業実践は完全でなくてもフィードバックは十分になされている。</p>	<p>①ユネスコスクールの活動に参加したが、職員と生徒への情報発信の仕方に課題を残した。</p> <p>・姉妹校交流をコロナ禍前の形で再開することができた。訪問した生徒、ホストファミリーの活動だけに終わらないようにすることが課題である。</p> <p>・総合的な探究の時間では、職員全体が協力した授業実践ができた。今後は、探究の時間の組み立てをさらに明確にする必要がある。</p> <p>③④組織としての授業改善に踏み出すことができ、他教科の情報も共有できた。職員全体の研究授業を行うことで、生徒へフィードバックも行えた。今後は全ての教科で研究授業の実践を行うことが課題である。</p>	<p>①ユネスコスクールの情報を随時発信し、多くの生徒が関心を持ち主体的に活動に取り組める環境づくりを行う。</p> <p>・参加した生徒、ホストファミリーの生徒の事前事後指導を行い、積極的に情報発信を行い、全校での国際理解教育につなげる。</p> <p>・今年度の活動の振り返りと整理を行い、引継ぎを行いながら、本校の総合的な探究の時間の核となる部分を確立したい。</p> <p>③④研修、講座の案内、実践例集等、情報収集と職員への周知方法を検討する。</p> <p>研究授業を早い時期に設定・実施し、年度内に改善、実践、生徒へのフィードバックができるようにする。</p>
2 生徒指導・ 支援	<p>①部活動の充実をとおして自己理解や他者理解を深める支援を行う。</p> <p>②交通安全指導を通してマナーの向上と事故防止に取り組む。</p> <p>③人権尊重の精神および規範意識を高める取組を推進する。</p> <p>④生徒一人ひとりの個に応じた生徒支援体制の確立を図る。</p>	<p>①部活動を活性化し、活動をとおして生徒の人格形成の支援を行う。また、自己肯定感を高めるとともに他者理解を深める支援を行う。</p> <p>③生徒の規範意識を高めるための取組を組織として実践する。</p> <p>④生徒一人ひとりが置かれている状況を把握するとともに家庭と連携した支援を行う。また、教育相談をとおして組織的に生徒を支援できる体制を構築する。</p>	<p>①生徒の主体的な活動の促進と部活動加入率を上げるための働きかけの強化を行う。また、部活動全体での礼儀や挨拶励行の働きかけを通して部活動に対する誇りや意識の高さを持つよう「自負心」を養う。</p> <p>③HR活動、学年集会、学校行事、登校指導などあらゆる機会において、規範意識の向上に繋がるよう教職員全体で指導を行う。</p> <p>④いじめアンケートや面談をとおして生徒一人ひとりの把握に努め、ケース会議、SC、SSW、家庭との連携を図りながら個に応じた支援を行う。</p>	<p>①1年生の部活動加入率が7割を超えたか。また、部活動調査において、自分の活動に誇りをもって行っているかという回答の生徒の割合が9割を超えたか。</p> <p>③生徒の問題行動、服装・頭髮指導の件数が昨年度より減少し、規範意識の向上が見られたか。</p> <p>④個々の生徒に応じた支援が組織的に行われ、適切な支援を行うことができたか。</p>	<p>①部活動勧誘に向けて、ラリー方式で全部活見学や広報活動を行い、1年生の部活動加入率は7割を超えた。しかし部活動調査での活動に誇りを持っているとの回答は7割5分にとどまった。主体的に部活動に関わった生徒も8割強にとどまるなど、部活動の内容面で目標を達成できなかった。</p> <p>③全職員で共通理解を図り生徒指導に取り組んだ結果、問題件数は昨年より減少した。規範意識が向上しつつある。</p> <p>④「いじめ・学校生活アンケート」や「子どもサポートドック」を実施し、担任による面談を通して、生徒一人ひとりの支援に努めた。</p>	<p>①顧問総会などによる部活動間の情報交換で、入部に対する顧問の意識を変えていく。また、部活動集会を行い、来年度に向けた部員勧誘の取組に対する意識を変える。</p> <p>・結果を出している部活動の表彰等で激励する機会を増やすことで生徒の意識を変えていく。</p> <p>③④生徒のいじめやSNS、インターネットのトラブルに対する理解を深める取組と意識の向上に継続して努めたい。また、次年度もアンケートとサポートドック活用し、生徒一人ひとりが安全で安心して学校生活を支援できるように職員での情報共有と生徒指導を確実に行っていきたい。</p>	<p>①部活動を通して身に付ける力は、先輩後輩の関係や、礼儀・マナーや挨拶など人として大切にしたい部分がある。高校生になっても部活動を継続して楽しめるように中学校でも育てていきたい。</p> <p>・部活動を通しての人格形成”という概念が現代の高校生には、伝わりにくいかもしれない。</p> <p>③④生徒間のトラブルをいじめアンケート等で把握し、早期発見早期対応が生徒の心の安全につながる。職員間で情報共有しチームで取り組むことが大切である。SNSも含め組織的な取組を望む。</p>	<p>①部活動活性化のため、勧誘の工夫や顧問への呼びかけ、顧問配置の工夫に取り組んだ。部活動の部員を中心に挨拶の大切さや、活動することの意義や誇りを持つことの重要性などを部長会や全体集会などを通じて呼びかけた。学校全体として部活動を活性化取組が必要である。</p> <p>③規範意識を高める指導を行えた。</p> <p>④「いじめ・学校生活アンケート」や「子どもサポートドック」を実施し、一人ひとりの支援に努めた。ただし、支援への方策を十分に検討する時間が確保できなかった。</p>	<p>①高校での部活動の意義を教員間で共有し、学校全体で部活動の活性化に向け、生徒に呼び掛け続ける活動を行うことが必要である。また、部活動への勧誘方法を部員に企画させる等の方策も必要である。加入率を上げ、部活動を通して人格形成の支援に努めたい。</p> <p>③規範意識定着に向け継続的に指導を行う。</p> <p>④SC、SSW、学校教育相談と情報共有の機会を多く設け、連携を高める。「子どもサポートドック」をより活用することで学校全体での支援体制を確立させる。</p>

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月11日実施)	総合評価(3月25日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	①大学等における多様な入試形態を見据え、生徒一人ひとりの進路希望実現に向けたきめ細かな支援体制を充実させる。 ②教科における学習活動と進路指導との連携を図り、生涯にわたって基盤となるキャリア教育を実施する。	①新課程直前の入試動向情報を的確に把握し、3学年だけではなく2学年についても情報を共有して生徒の希望進路の実現に向けた支援を行う。 ②本校生徒の入試に向けた課題を共有し、教科指導と連携を図り進路の支援を行う。	①進路指導室を整備し、相談体制を充実させる。また、大学等入試担当者を招聘した相談会を開催する。 ②外部試験を年4回実施し、学力の伸長と定着を図る。試験の結果分析会を通して生徒個人々の課題を認識させ効率的な学習を進めるための機会を提供する。	①進路室の環境整備ができたか。入試担当者による5大学以上の相談会を実施できたか。 ②試験結果分析会を実施することができたか。また、それを踏まえて生徒個人々に学習課題を提示することができたか。	①進路室に相談デスクを設置し指導室を利用しやすい雰囲気模様替えをした。4大学を招致して3年生希望者対象とした相談会を実施した。また、同日別時間に1・2年生希望者対象にも進学相談会として開催した。 ②教員・生徒対象の結果分析会を3回実施することができた。	①指導室内の整理・整頓を進め、上級学校資料の閲覧や相談がしやすい環境の整備を一層進める。3年生対象の相談会や1・2年生対象の受験相談、進学相談会は校数を増やし実施する。  ②分析会での情報を直接保護者へ伝えることができるような方法を検討し具体化する。	①進路指導室の利用しやすい環境は、より生徒自身が進路選択のための活用を促す。 ②結果の分析は、生徒個々の課題が明確になり、より進路実現に向けての方法を考えやすくなっている。 ・入試の多様化に向けてしっかり対応し十分に実績が挙げられている。	①入試動向の情報を整理し、生徒の相談に対応することができた。また、進路指導室の環境整備も行き、利用しやすい環境を作ることができた。 ・1、2年生への支援には課題を残した。 ②外部試験を年4回実施した。生徒に対しては結果報告会を実施した。	①キャリアグループの職員の相談スキル向上が課題である。また、計画的な支援を実施する必要がある。 ②4回の外部試験は数年間継続実施が望ましい。 ・個別面談に活かせる効果的な資料を学年団と作成し、提供する。 ・教科指導と連携した進路支援を模索する。
4	地域等との協働	①生徒一人ひとりが社会参画意識をもって地域や世界とつながる意識を高める支援を行う。 ②地域等と連携・協働した災害への備え、対応をさらに深める。	①学校周辺の美化活動や地域貢献活動を実施し、地域に愛される学校を目指す。  ・部活動や個人でのボランティア活動や地域への貢献活動を通じて、社会の一員としての意識を醸成する。 ②DIG研修や避難訓練、地域の行政機関と連携した防災体験訓練をとおして災害に対する防災意識を高める。	①各学年で年1回、学校周辺の美化活動を行う。また、各部活動や委員会活動ごとでも、地域のゴミ拾い活動を実施する。 ・近隣の小学校への部活動の派遣や、海老名市との連携を行い、地域との連携を積極的に図る。ボランティア活動への参加を促し、多くの生徒が社会の一員としての意識を持てるようにする。 ②避難訓練、DIG研修、防災体験訓練を行い、自己の命を守る行動と他者に対する支援等「自助・互助・公助」の防災意識を高める。	①各学年で年1回、学校周辺の美化活動を実施することができたか。部活動や委員会ごとでも活動を実施することができたか。 ・近隣の小学校など地域との連携事業の回数が10回を超えたか。 ・ボランティア活動調査で参加率が全校生徒の1割を超えたか。 ②避難訓練、DIG研修、防災体験訓練後のアンケートで「自助・互助・公助」を意識した生徒の割合が7割を超えたか。	①計画通り学校周辺の美化活動を実施した。 ・海老名市主催のふれあいフェスタやえびな市民まつり、海老名図書館などとの連携事業やボランティア活動が行われたが、連携事業もボランティア活動も目標回数には届かなかった。 ・ボランティア活動調査の結果は1割に満たなかった。 ②DIG研修、避難訓練、公的機関と連携した防災体験訓練をとおして、生徒の防災に対する意識を高めることができた。避難訓練では、共助の場を設定し意識づけを行った結果、8割強の生徒が自助、共助の意識が高まったと回答した。	①全学年が実施できるような時期を見直した活動を計画する。 ・来年度は有馬高校から近隣の小学校や地域と積極的に連絡を取り、連携事業やボランティア活動への参加機会を増やす。 ・個人や小集団での参加ができる機会を作り、ボランティア参加への意識向上を図る ②DIG研修等を防災委員主導で実施できるように計画的に行っていきたい。次年度も避難訓練や防災体験訓練の中に、自助、共助を意識させる内容を取り入れた活動を継続する。	①学校周辺の美化活動は地域貢献につながっている。海老名市との連携事業として、中学校との連携を図ることを取り入れてもらえると良いと考える。高校生の学習ボランティアを派遣し支援学習会等での地域連携を望む。 ・地域への取組を継続し、生徒自身が意義を自発的に参加する力を培って欲しい。 ・地域の自治会と何か連携ができるとよい。 ②地域において、災害時の危険エリアをより明確に生徒に伝えることで生徒の防災意識が高まると思われる。	①美化活動は年2回実施できたが、全学年で実施することはできなかった。全員が参加できるよう計画を立てたい。また、ゴミ拾い以外の貢献活動も検討したい。 ・海老名市主催の活動や地域の図書館と連携し地域貢献ができた。今後、小学校や中学校との連携を復活させることが課題である。 ②避難訓練や防災体験訓練を通じて、一人ひとりの防災に対する意識の向上と自助・共助の意識の醸成に努めることができた。今後は、地域自治会との連携が課題である。	①実施する時期を見直し、全学年が参加できるようにする。生徒同士が地域貢献について話し合う場を設け、生徒自らが積極的に地域貢献する環境作りをする。 ・近隣の小学校や中学校との連携を高校側から持ち掛け、企画を立案する。また、ボランティア活動の窓口を作り、生徒がボランティアに参加しやすい環境を作る。 ②地域連携の防災訓練をとおして、共助の意識を更に高めることが企画を立案する。
5	学校管理 学校運営	①ICT環境の整備改善を進めるとともに、HP等を活用して本校の教育活動に係る情報発信を充実させる。 ②安心・安全な教育環境の整備を充実させるとともに、事故・不祥事防止のさらなる徹底を図る。 ③働き方改革の推進に向けて、組織的な取組を進めていく。	①ICT環境の整備改善を進め、教職員の機器活用のスキルアップを行う。 ・HPをとおして本校の教育活動に係る情報発信を行い、保護者及び県民に開かれた学校を目指す。 ②生徒・教職員が安心して安全に過ごせる教育環境整備を行う。 ・事故及び不祥事防止の徹底を図り、信頼ある学校を目指す。	①ICT環境の整備改善を進め、機器の管理と運用方法を新たに構築する。 ・機器の有効活用を目指した研修会を複数回実施する。 ・職員へHP更新を周知するとともに、定期的な更新の声掛けを行うことで本校の教育活動に係る情報発信を行う。 ②年2回の学校施設点検を実施し、速やかな修繕対応を行い、事故のない環境整備を行う。 ・管理職による声掛けや研修等で事故・不祥事を未然に防止し、保護者や県民から信頼される学校づくりを行う。	①事故防止を意識した管理体制・運用方法への改善ができたか。 ・年に2回以上の研修会を開催できたか。また、8割以上の教員がICT機器を活用した授業を行ったか。 ・行事ごとにHPを更新することができたか。また、その他の活動についても高頻度で更新が行えたか。 ②学校施設設備点検後の対応をすることで、未然に事故を防ぐことができたか。 ・年間に事故・不祥事がゼロであったか。	①ICT機器の管理体制を確立することにより、管理体制の強化をすることができた。また、各教室のICT環境の整備も行えた。 ・機器の有効活用の情報交換は個人間での共有に留まり、複数回の研修会実施には至らなかった。また、教員の機器活用は9割を超えている。 ・HPの更新については行事ごとに行い、本校の教育活動の情報発信を行うことができた。 ②学校施設点検後の対応がしきれていない。 ・声掛け、研修等を定期的に行い、職員への事故・不祥事防止の意識の啓発を行った結果、事故・不祥事をゼロにすることができた。	①次年度も管理体制を継続する。また、機器の整備を継続的に行い、特別教室での活用も可能にする。 ・全生徒の1人1台端末に対応すべく、複数回の機器活用研修会を実施できるよう計画する。また、授業における機器の活用方法は継続的課題である。 ・グループ学年でのHP更新の意識を全職員に浸透させ、研修誰もが更新可能な体制を作る。 ②学校施設点検後の速やかな修繕対応が行われていないことを改善し、校内の安全な環境の整備を充実させていきたい。 ・今後も事故不祥事防止の啓発活動を継続する。	①周辺機器の整備は欠かせない。また、教職員のスキルアップを図る研修会だけでなく、日々の活動の中で使用頻度を増やすことが必須である。また、DX化を推進し、働き方改革にもつながられるようにできるとよいと思う。 ・研修は集合形式でなくてもオンデマンドによる個々に行う形態も有効と考えられる。 ・教員が危機を抵抗感なく扱えるよう研修は必要である。 ②学校施設の点検・修繕は予算面で厳しいが、校内の安全環境は整備が進むと良いと思う。	①機器の管理体制を確立することができた。引き続き現在の管理体制を継続する。 ・機器活用のための研修は継続的に行う必要がある。また、ICTを活用した授業実践例の情報収集ができず、課題が残った。 ・HP更新はできているものの更新できる職員が限られている。  ②施設点検を行い教室等の整備を行えたが、振り返りが遅く、修繕対応が不十分な箇所も残った。速やかな対応に努める必要である。 ・年間を通して事故不祥事防止ゼロに努めることができた。	①ICT機器の整備と管理を継続し、特別教室における整備も行う。 ・機器活用研修会を年間に複数回実施できるよう計画する。ICT機器活用の実践例も収集し、情報共有する。 ・HP更新担当者をグループ、学年ごとに複数名割り振る。  ②学校施設点検の振り返りを速やかに行い、修繕対応をこまめにする。  ・事故不祥事ゼロを目指し、定期的な研修を設けることで意識の定着に努める。

